

称号及び氏名 博士（臨床福祉学） 松久 宗丙

学位記番号 甲第9号

学位授与日付 平成25年3月21日

学位申請論文名

『 End of Life Care におけるソーシャルワーク実践
—エコシステム構想を活用して— 』

学位申請論文審査委員会

主査	教授	安井	理夫
副査	教授	浅野	仁
副査	名誉教授	太田	義弘

- I 学位申請論文の内容要旨
- II 学位申請論文審査結果の要旨
- III 最終試験結果の要旨
- IV 公聴会の日時
- V 審査委員会の所見

I 学位申請論文の内容要旨

本論文の目的は、要介護高齢者の **End of Life Care** におけるソーシャルワーク実践を利用者中心に展開していくために、利用者の意思表示が困難になる前から今後の方向性などを家族とともに確認しておくためのツール開発と、この分野におけるソーシャルワークの意義について考察することである。

その目的を達成するために、本論文では3つの仮説を設定している。① 人は、人生の最期にもっとも大きな意味をもつものである、② **End of Life Care** には、高度専門職としてのソーシャルワーカーの存在が不可欠である、③ **End of Life Care** には、エコシステム構想の活用が有効である。これら3つを検証・考察している本論文は8章から構成されている。

第1章では、**End of Life Care** をめぐるいくつかの専門職の視野と発想を概観しながら、要介護高齢者の疾病や疾患ではなく、その人固有の生活とその全体性に着目するという立場を明確にしたのち、本研究の仮説・目的・方法を述べている。

第2章では、居宅介護支援事業所を対象としたアンケート調査と要介護高齢者の家族に対する聞き取り調査から、要介護高齢者の **End of Life Care** を可能にする条件を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて考察している。

第3章では、**End of Life Care** をめぐる概念をスピリチュアリティも含めて整理・考察し、① ターミナルケアやホスピスケアの理念を受け継いだ広い概念であること、② がんなどの疾病や疾患に特化しないこと、③ 必ずしも終末期に限定されたものではなく、ロングタームの概念であること、④ **End of Life** には、人生の目的という崇高な意味があること、の4つにまとめている。

第4章では、本研究の視点であるソーシャルワークの概念を整理している。人間の生活を理解し、支援していくためには、その人自身の実感を尊重して、独自の秩序（広がりや内容、流れなど）をもち、地域性や文化性に鑑みた生きざまを生活コスモスとしてとらえることの重要性を指摘し、生活情報をビジュアル化して示すことのできる支援ツールを活用することによって理論と実践を包括・統合的に展開していくエコシステム構想の概要について述べている。

第5章では、先行研究のひとつである高齢者版支援ツールを手がかりとして、**End**

of Life Care 支援ツールに求められる構成子と内容について考察している。

第 6 章では、事例 C 氏との支援プロセスのなかで、End of Life Care 支援ツールが共同で開発された経緯が述べられている。その結果、スピリチュアルの項目や医療・看護サービス、介護サービス、ソーシャルワーカー、他職種の項目を具体的に表現できるようになるとともに、開発のための参加と協働が C 氏のエンパワメントにもつながっていることが指摘されている。

第 7 章では、利用者と家族の相互変容プロセスが考察される。一度は離れかけていた家族の想いが多職種連携のチームアプローチや End of Life Care 支援ツールによって、おたがいの想いに寄り添う方向に変容し、D 氏の生きざま・死にざまが遺される者たちの生き方となって継承されていく様が詳述されている。

第 8 章は、本研究の総括である。End of Life Care におけるエコシステム構想の意義として、支援ツールを媒介とした生活をめぐる共通認識の促進、利用者自身が今まで関心をもっていなかった部分についての気づきや生活を見る視野の広がり、を指摘し、これらは利用者とソーシャルワーカーとの参加と協働による実存性と科学性を併せもった支援展開によってこそ可能になること、これらの能力を併せもつことが高度専門職としてのソーシャルワーカーに期待される資質であることに言及する。そして、事例検討を通して、人生の最期におけるもっとも大きな意味とは生き方の伝承であり、End of Life Care の“End”はただの終わりを意味するのではなく、そこから新しくはじまっていくというとらえ方もできると指摘する。

さいごに、本研究の課題として、誰もが理解しやすく使いやすいツールへの改良と、支援ツールを活用した多職種連携のチームアプローチを構想していく必要性を指摘している。

II 学位申請論文審査結果の要旨

1. 本論文は、松久氏が **End of Life Care** の現場にソーシャルワーカーとして従事するなかで得られた問題意識が執筆の出発点となっている。したがって、研究は利用者に対するサービスの質の向上をめざした現実的で、有用な内容に終始している論文と評価する。
2. 本研究の評価できることのひとつは、事例研究の内容が精緻かつ平易な点である。ソーシャルワークにおける支援の科学化というテーマをめぐっては、専門家の枠組み（高度に抽象化された実証のアルゴリズムや極度に難解な技術（skill）や認識過程の分析など）にもとづくものが多く、利用者を置き去りにしている傾向を指摘できるが、本研究では、利用者、家族、支援者といった支援の当事者たちが、生活コスモスをめぐる認識や実感のずれを、支援ツールを介してていねいに共有し、みんなが理解し納得しあいながら協働するというスタイルで、支援や事例研究が展開されている。このような本来的な意味での利用者のための方法は高く評価できる。
3. 本論文に関連して、学会発表が5席、論文執筆（査読付）が4編（出版予定を含む）の多くを数える。このような活発な研究成果の公表は、本研究が一定の社会的評価を得ている証左である。
4. さいごに、研究上の課題として、松久氏も記述していることであるが、本研究が、ある特定の事業所における実践にもとづくものであり、ここでの知見がすべての要介護高齢者や事業所に適用できるとは限らない。次の機会には、より汎用性のある研究を期待したい。

Ⅲ 最終試験結果の要旨

上記の学位申請論文審査結果のとおり、審査委員会は全員一致で本学位申請論文を博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定しました。

Ⅳ 公聴会の日時

2013年2月13日

Ⅴ 審査委員会の所見

本学位申請論文審査委員会は、本論文が **End of Life Care** におけるソーシャルワークの支援方法に関して、新たな知見を提示した内容であり、博士学位に相応しいものと判断します。

以上